



OVERSEAS

Thailand —タイ王国—

海外事情



バンコク都の生活や文化 ～海外業務を通じた知見～



鶴見 悠史 TSURUMI Yushi

パシフィックコンサルタンツ株式会社
環境創造事業本部/資源循環マネジメント部

はじまりの地、バンコク

大学1年の夏休み、アルバイトで貯めたお金で初めて一人で海外を旅したのがバンコクであった。もう10年以上も前のことだ。一ヶ月弱の滞在だったが、異国情緒あふれる東南アジアの町並みや文化、特有の気候の中、リュック一つで旅をしていると、2週間を過ぎる頃にはバックパッカー気分になり、大人びた充実感を感じたことを思い出す。この経験がきっかけで、夏休みになるとインド、トルコ、香港等を旅するようになり、滞在した各地では異なる文化・

習慣・考え方の存在や語学の必要性などをあらゆる場面で実感することになった。異国への旅で感じたことが自身の価値観に影響を与えたという意味で、そのきっかけとなったバンコクは自分にとってはじまりの地だ。

そのような訳で、海外での初めての仕事先がバンコクに決まったのは、偶然であったのかも知れないが、私にとってはとても自然なことであった。日常生活に密着した大衆的な屋台、人々の信仰の場であり観光名所ともなっている歴史的な寺院、

若者や外国人で賑わう商業施設などが混在して醸し出される魅力は昔のままだが、現在のバンコク、特に中心部はより一層発展して近代的なビルが建ち並び、東京の中心部と見紛うほどになっている。

このバンコクでの仕事を通じて得た知見を中心に紹介する。

バンコクでの日々

バンコク都における気候変動にかかわる計画策定と職員の能力開発を支援する専門家チームの一員として、概ね二ヶ月に一度のペース

でタイ王国の首都バンコクに渡航している。世界的にも人気が高い観光地に仕事で行けるなんて羨ましいと言われることもある。しかし一度の滞在期間が短期間であることもあり、スケジュールをこなすために毎日せわしなく活動し、ホテルとプロジェクトオフィスの往復で終わる一日を繰り返していると、気がついてみると帰国前夜のパッキングという日々である。そんな中でも、旅で訪れた際には気がつかないが、仕事で訪れてみると新たな発見があったりもする。

名物ともいえるバンコクの渋滞

バンコク都内はBTS (Bangkok Mass Transit System) と呼ばれる高架鉄道(スカイトレイン)や地下鉄といった鉄道網が整備され、一昔前に比べると公共交通網が充実してはいるものの、依然として車中心の社会である。整備されている道路網に対して自動車保有台数が物理的に多いからなのか、信号システムに改善の余地があるからなのか、名物ともいわれるほどの朝夕の通勤時間帯などの慢性的な渋滞は問題だ。ひどいときには普段10分で通過できる距離に1時間を要したとい

う話を聞くこともある。どんな場所に移動するにしても、移動する時間帯における渋滞の程度を事前に確認しておくことがとても大切だ。現地の人々は日常のこととして渋滞と付き合っている様子で、どれだけ時間を浪費するか分からない渋滞に引かかるといらいなら、BTSで目的地の近くまで移動して、そこからタクシー等の手段で移動すればいいのに、と考えるのは日本人の時間感覚なのかも知れない。

そうはいってもこの問題に対して何も対策が施されていない訳ではなく、車中心の生活を見直すきっかけをつくるキャンペーン「Car Free Day」が定期的に開催されている。ある訪問期間中には、普段は車がごった返し頻繁に渋滞している道路において、自動車の通行を一時的に規制して自転車の通行を優先させるイベントが催されていた。バンコクでは日本のように自転車を移動の足として利用する人を

ほとんど見かけたことがないし、5分も外にいれば汗がにじんでくるような地で、自転車愛好家がどれほどいるものなのかと半信半疑でいたところ、予想に反して道路の片側一車線が切れることのない自転車の列で埋め尽くされるほどの盛況ぶりで驚いた。BTSの駅のプラットフォームで若者達が今風の自転車を押ししながら電車を待つ姿には、未来のバンコクを見た気がした。

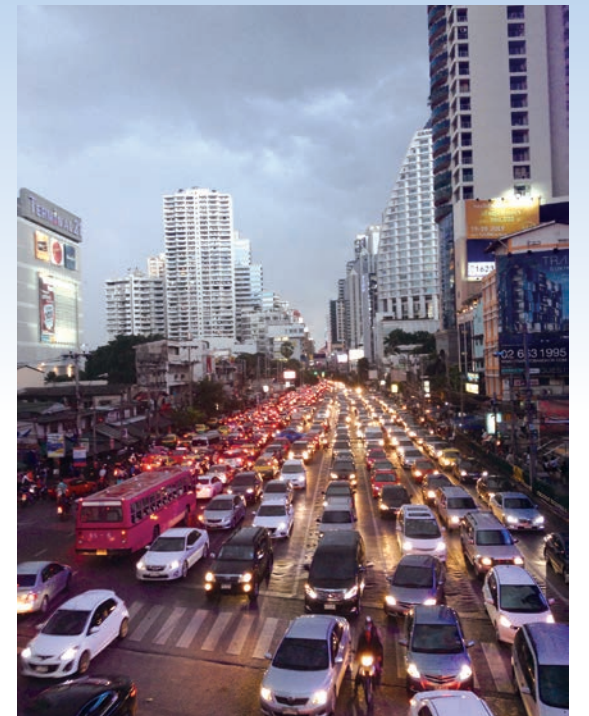


写真3 バンコク名物の渋滞

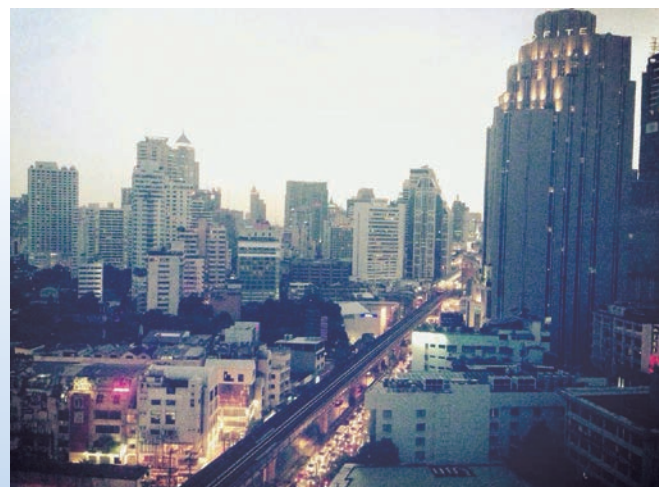


写真1 バンコクの近代的な町並み



写真2 バンコクを走る高架鉄道BTS



写真4 Car Free Dayの様子



写真5 若者が自転車を持ってBTSを待つ様子

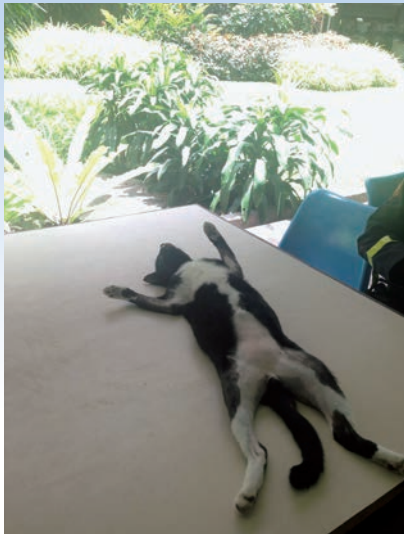


写真6 バンコク都庁の中庭にて（猫もリラックス）

異国を感じさせる慣習

日本においては、個人差はあるが会議開始時刻の5分前にはその場に集まっておくというのは、常識と言ってもいいだろう。それに比べるとタイは時間に寛容だ。会議の相手が時間にうるさい日本人ということに気を使ってか、時間通りに集合する人もいるが、時間前に全員が着席し、時間通りに会議が始まることは稀な気がする。当初は、このペースに馴染むことが出来ずに戸惑っていたが、「郷に入っては郷に従え」の精神でその場の流れに身を任せて過ごしていると、徐々にそのペースが心地よくなってくるので面白い。日本人でもタイでの駐在期間が長くなると現地のペースに馴染んでしまい、日本に帰国すると苦勞するとい

うエピソードには、妙に納得した。

進む女性の社会進出

タイの行政組織における女性の躍進は、私にとって非常に新鮮だった。タイの企業における女性管理職の割合の多さは、世界的に見ても顕著であるという記事を目にしたことがあるが、我々のカウンターパートであるバンコク都の環境局もその例外ではない。組織のトップでリーダーシップを発揮する局長や副局長は女性だし、その部下の職員にも女性が多い。

我々のプロジェクトオフィスは、バンコク都庁舎のオフィスの一角を間借りして設置されているのだが、オフィスを見回すと職員はほぼ女性だ。決して大げさな表現ではない。そんな職場環境だからか、夕方近くになると学校帰りと思われる小学生くらいの子どもが、プロジェクトオフィスの椅子にちょこんと座ってお母さんが仕事を終えるのを待っていたり、ようやく首が据わったくらいの赤ちゃんを抱いたお母さんがオフィスを歩いていたり、和やかな雰囲気包まれている。二ヶ月に一度のペースで訪れていると、その度に知った顔の子どもたちが成長していて微笑ましい。

政治状況と人々の反応

日本でも報道されていたように、

2013年末頃からタイではデモが頻発し、死傷者が出てしまうほどの不安定な政治・社会状況が続いていた。この影響を受けて、我々のプロジェクトも約半年の間、渡航を控えることを余儀なくされていた。訪問が再開されたのは、デモ等の混乱が落ち着き、様々な情報から安全が判断された時期であった。しかし運悪くそのタイミングで軍が厳戒令を発令し、クーデターに発展したのである。厳戒令から2日後の夕方頃、プロジェクトオフィスで仕事をしている最中に、クーデター宣言のニュースが入ってきた。

クーデターという日本人にとっては非日常的な言葉であり、「これは大変なことになってしまった」と思った。インターネットのニュースやメールのチェックなどで仕事どころではなく、ホテルに戻って待機となった。夜間の外出が禁止され、食堂は20時で閉まってしまったため、ホテル近くのスーパーマーケットで惣菜を買って部屋で食事をとることにした。これとは対照的に、現地の人々の反応はいたって冷静であった。8年ぶり19回目といわれるクーデターに慣れているのか、それとも治安が悪化するほどの事態にはならないことを承知しているのか、見ていた限り皆いつもどおりであったように思う。

ニュースでは、兵士と笑顔で写真



写真7 タイのフルーツ（マンゴーとマンゴスチン）



写真8 タイ料理（タイ風ラーメン）



写真9 タイ料理（見た目によらず辛いので注意）



写真10 タイ料理（商業施設のフードコートにて）



写真11 昼食はこんなスタイル

を撮る市民の姿が採り上げられていた。頻発するデモ、厳戒令の発令とクーデターへの発展、それに対する人々の冷静な反応など、異国としてのタイを肌で感じた経験であった。

海外業務を通じての知見

私は入社以来ずっと国内を主軸とした部署に所属しているため、これまで海外業務にアサインされる機会にはなかった。いつか海外業務に挑戦してみたいと考えていた一方で、自分自身にそのために必要な能力が備わっているのかという不安から、躊躇する気持ちもあった。私と同じような心境の方がいるのではないかと思うので、誤解を恐れず書くとしたら、国内業務も海外業務もコンサルタントに求められる能力に大きな違いはないと解釈している。私はまだ経験が浅いので、海外業務特有の難しさを知らないのでは、という指摘もあると思うが、恐らく、この直感に近い私の解釈は外れてはいない。熱意とチャンスがあるのであれば、臆することなくチャレンジすることをお勧めしたい。私の場合、海外業務での経験は、結果的に

コンサルタントとしての幅を広げることに繋がっていると思うし、「国内外問わず活躍できるコンサルタントになること」を明確なビジョンとして持つことが出来るようになった。感じ方は人それぞれなので、全員が私と同じ考えに至るとは思っていないが、コンサルタントを生業とする者として多くの知見が得られることは間違いないと思う。また、仕事でその国と関わると、その国の文化や経済を形成する人々との関わりが、必然的に密になり、その国の今をリアルに感じることになる。また、自らが外国人として人々と接し、その国に対する理解を深めるということは、相対的に日本について深く考えることになるので、少し大げさかも知れないが、自分への期待も込めて書くとすれば、人としての深みにも繋がるような気がしている。

最後に

タイの食について最後に少しだけ紹介したい。滞在期間中はプロジェクトオフィスがあるバンコク都庁の食堂で職員の方々と肩を並べて昼食をとっている。見た目によらずご

く辛い料理があったり、日本人好みのラーメンがあったり、季節のフルーツ（マンゴーやマンゴスチンなど）を扱うお店があったりとバラエティーに富んでいる。中には列が出来るほど人気の店があり、当初は食べたい料理を手にすることに苦勞したが、何度か通っているうちに店主と顔なじみとなり、ニコッとすればいつものお気に入りを出してくれるようになったので今では随分と楽になった。また、スーパーのフードコートなどで食べられる、マンゴー・スティッキークライス（マンゴーともち米を甘いココナッツミルクと絡めて食べる料理）は絶品なので試して欲しい。

今回は、海外業務を通じて得た私なりの気づきを、身近な出来事を中心にご紹介した。皆さんに、私が体感したタイの風を感じて頂けるよう工夫したつもりであるが、文字数に制限がある誌面で表現することの限界もあり、全てをお伝えすることは出来なかったと思う。皆さんも機会があれば是非、現地に足を運んで頂き、バンコクの今を五感で感じて頂ければ幸いである。